

27-29 = 3022

# 僕の運動

牧野信一



僕は田舎にゐるとは毎朝毎夕飲かすことなく  
 不思議に勇壯な運動を試みます。運動には相  
 違ありませんが僕のは体日月や精神修養美食の目  
 的ではなくて、朝は龍巻になつて龍巻に來る  
 煙りに似た悲しみと驟ひ、夕べは得作の知れ  
 め火に似た情熱に追はれて奮戦し——といふ  
 風な孤獨の騒ぎで、だから僕は馬に乘る、オ  
 ートバイで駆け廻る、フエンシングの練習を  
 してゐる、棒高飛びもある、機械作操を試み  
 る、大酒を喰ふ、舟を漕ぐ、夫婦喧嘩もある  
 、美女を追い廻す、水泳を行ふ……等と種々  
 雑々な活動をしますが、以上填字けたもの、う  
 ちの幾つかは別としても、僕のは決してノル  
 マルな型をもつて枝に従ふといふのではなく  
 て、自分では解りませんが、あそらくその少女  
 のだらしたなく、醜く、若し眺める者があれ

三三三三三

ば憤飯の儘もなく心ち顔を変むけるに處ひな  
 いのぢあ。最後の一句を元氣よく合唱して  
 呉れ給へよ。と云ひながらアウエウの  
 酒場で不良徳生が、毒を呑んだ鼠の眼を奴  
 のとぶろが僕の所斬に必死語ある。アウエウ  
 の中にあって、鼠が「苦痛に堪へぬわこい  
 のしこ、掻き捲りては歯が嚙み、悶え悶えと  
 跳ね狂ひ、甲斐なく萎れて倒れしは、あんな焦  
 れて悶れる物うに——  
 合唱——あんな焦れて悶れるやうに——  
 息も切ぬく絶えぬに、爐のほとろに

まろび伏す……あんな焦れて悶れるやうに、  
 (合唱) あんな焦れて悶れるやうに——  
 何とか何とかと知らずにお腹へて七轉八倒  
 あんな焦れて悶れるやうに、(合唱) あんな焦  
 れて悶れるやうに……で、僕の運動は  
 まろしく、この歌どうなひはやされるべき  
 類ひのものなうです。その上僕は、この歌を  
 いろの間にかそらんぬてしまつて(この如く  
 僕は今と云ふ友達の家の二階に滞在して、

山田

友達の机に就つてこれを書いてゐるのだから  
 何とまあ節朗らかに、こいつを口吟みながら  
 う——僕も、稍々もすれば口のうちに  
 も鳴えへたての流行歌のやうに口吟むのが癖に  
 なつてしまひました。節は、その時々に依  
 つて變り、知る限りの唱歌や童歌の節で口吟  
 みます。

で、僕の運動の話をつけ加へますか、僕は  
 昨年の春日あたりから、フエンスンシングに興味  
 をもつて、人知れぬ朝な夕な軽い剣を打ち振

つてゐます。が、あんな詠で僕は因習を<sup>相手</sup>  
 前あろかんの前では断いて行はぬのだから、閉  
 め叩つた書齋が、或いは<sup>裏</sup>山<sup>の</sup>木<sup>を</sup>深く忍い入  
 つて、空気を相手に花々しい活躍を試みるの  
 でありませう。いつの間にか僕は、僕流の型を  
 自得して、勇敢な<sup>ラッパ</sup>で、おと<sup>おと</sup>か  
 胸を守つたり、甘鮮やかな<sup>ラッパ</sup>で、敵  
 を<sup>リ</sup>らせ、口笛を吹きながら、モッテして  
 やつたり——そして、<sup>威</sup>威<sup>の</sup>昇<sup>天</sup>の<sup>想</sup>いと  
 馳せて胸をいさげ、<sup>歌</sup>歌をうたひます。が、何

田中 幸三

とまあ心ちうら悲しくなることには僕が欲は  
「あんなに心なして……」の他より口に出ないのど  
あつます。

僕は、この僕がフエニシゴに執いての幾  
つかの息苦しいエピソードを誌すつもりでパ  
ンと執りました。規定の残存に達したので  
、反つて吻ツ 気分よくと既にとして、空を  
眺めました。——然し、何んな出たら目な格  
構ども、あんな運動を試みようと健康に益  
するとちうらなつといとらんへて、斯うしてもしこ

旬あまり甲舎を離れ、勉をきめて、斯んな日  
を送つてゐると、却りにはあの夕暮暗い花々しい  
竹林のことが思はれてなりません。都の酒が僕に  
は不調なるのが、運動が不調のせぬが、大量  
の葡萄酒の酒が胸先を支へてゐて、大変苦しい  
のどあつます。僕はたの午の平で胸板を撫で  
たり、 「ゲツ、ゲツ、 あ、苦しい！」と叫い  
たり、水もがががと呑んだり、 「猛烈な運  
動を試みなければ堪へない。スハハ社まじこ  
れを駆け足で持つて行くか、何処かで休ませ

一トハイを探さうかしと喰いたうしなから、  
 この稿を終り。パンを疑したまへ、急先に向  
 けて、気の毒いな、<sup>鮎</sup>の身を構へをしなせし  
 ました。そして、僕の口吟む「合唱」が、何  
 とつ小おけもほく<sup>か</sup>とらおに重々しく科白  
 のやうに喰られたのが、<sup>過</sup>然に階下の女房の  
 耳に入り、<sup>外</sup>出しようとする僕の袂をとらへ  
 て、あなたは今来て以来何だかソワソ  
 ワとしてゐて奴だ。まるで、<sup>あ</sup>いごも焦れこ  
 むるやうだ。甚しむ私の<sup>女</sup>房を<sup>あ</sup>まよふやうなこ

とを<sup>外</sup>びし<sup>ら</sup>の<sup>解</sup>つたら——と云つて  
 屹々と睨みつけました。

大變に不佞哉な文章を書いたしまつたこ  
 とをおゆるし下さい。  
 (四月九日午)